

特別賞 三省堂書店賞

『日本人と天皇 一昭和天皇までの二千年を追う』 田原総一朗著

経営学部 会計学科3年 戸谷 庄吾

2019年4月30日。この日は、天皇陛下の生前退位の意向により、平成という時代が終わりを迎える歴史的な日である。天皇陛下と聞くと、国内外の戦争慰霊地で花を手向け平和を願う姿が印象的である。では、天皇は日本人にとってどのような存在なのか。たとえ日本人であったとしても、この疑問に明快な答えを出すのは難しいだろう。

一般国民と天皇の間には数多くの相違点が挙げられる。例えば、天皇には「山田」や「佐藤」のような姓が存在しない。今上天皇でいえば、名は「明仁」だが姓はないのである。本書によれば、なぜ姓がないのか、そしていつから存在しないのか、明確にはわからないようだ。

藤原道長、平清盛、源頼朝、足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、マッカーサー。歴史に名を遺した各時代の為政者たちである。彼らは、簡単に天皇を排除し大きな権力を掌握できたはずである。しかし、そうはしなかった。本書が興味深いのは、歴史上の権力者たちと天皇との関係が徹底的に分析されている点である。

徳川家康は、朝廷を統制する法として禁中並公家諸法度を定めた。この法により、天皇は学問をすべき存在と定義された。禁中並公家諸法度は、鎌倉時代の有職故実書である『禁秘抄』を参考に作られている。有職故実とは、古代における宮中の制度や儀式を研究する学問である。つまり、ここでいう学問とは政治学を意味する。ポイントは、江戸時代は古代や中世と違い天皇が政治に深く関与しない時代だった、ということである。つまり、家康は天皇を政治的観点から軽視したわけではなかった。言い換えれば、彼は江戸幕府の政治的権力は天皇ありきと考えていたのではないか。このような看過できない学説がいくつも紹介されているのである。

私が高校で習ったのは、戦前の天皇は神の子孫として敬われていた、という史実である。それが戦後になり、天皇は日本国憲法により「象徴」と明記された。それでもなお、現代の日本人には「天皇は日本で最も偉い人」というコンセンサスがある。その偉大さは、天皇誕生日という国民の祝日があることから説明できる。まるで、キリスト教圏の国々におけるクリスマスのようなものである。

天皇という存在は、どのように定義づけられるのが理想的なのだろうか。我々は元号が変わるといふ時代の転換期にいる。そのような時期だからこそ、本書を手に取り、天皇というテーマを深く考えてみてほしいと思うのである。